

萩谷順教授定年退職記念号に寄せて

和田, 幹彦 / WADA, Mikihiko

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / Review of law and political sciences

(巻 / Volume)

118

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2020-07-31

萩谷順教授定年退職記念号に寄せて

前法学部長 和田 幹彦

萩谷順先生は、ご職歴の当初の一九七一年から二〇〇五年までの三四年間、朝日新聞の記者としてドイツ国際放送の派遣員、カイロ特派員、ウィーン特派員、外報部次長、ボン特派員を歴任するなど、国際的に活躍するジャーナリストとしての実務経験とヨーロッパ研究における学識が高く評価され、二〇〇五年四月に法政大学法学部に教授としてご着任されました。ご着任と同時に、法学部には国際政治学科が新設されました。萩谷先生は、ご着任前から、そして直後から継続して、法学部国際政治学科の創設に多大なご貢献をしてくださったことに、先ず言及したいと思えます。すなわち、二〇〇五年三月のご着任前にすでに、国際政治学科開設記念のシンポジウムで司会を務めてくださるなど、新設学科の重要性を社会にアピールするうえで極めて重要な役割を担われました。

ご着任以来、二〇一九年三月末日をもって法政大学法学部を定年退職されるまで一四年にわたって、ご専門であるメディア政治論を中心に法学部において、初めは政治学科、二〇〇九年からは国際政治学科の教授として教鞭をとられ、学部生・大学院生を熱心に指導されるとともに、研究・教育さらには学内行政において多大な業績を残されました。本学大学院・学部では、「マス・コミュニケーション論」、「現代メディア論」、「ジャーナリズム実践講座」、「グローバル・メディア研究」、「ヨーロッパ政治史」などの科目をご担当くださいました。ご担当科目のうち、新聞記者がリレー形式でニュースの最前線を講義する「ジャーナリズム実践講座」および「現代メディア論」の開設の際には、

朝日新聞社から協力を得るなど、萩谷先生のご貢献には特に大きなものがあります。これらの科目は常に、熱心な多数の学生の注目を集め、ご担当の最終年度であった二〇一八年度春学期の授業参加者は、記録的な多人数となったほどです。また、法政大学での政治学・国際政治学のご授業のみならず、全学の教育上、極めてユニークかつ効果的である、朝日新聞の記事を解説付きで学ぶ「時事ワークシート」の全学的導入も萩谷先生のご尽力によるものでした。この「時事ワークシート」は、最新記事と時事問題および解答・解説がセットになった教材を通じて、社会が学生に求める語彙力や理解力の強化、論理的思考の養成、就職活動の際の学習支援として多くの学部で活用されました。また、「演習」つまりいわゆるゼミでは実社会に生き抜く力を身に付ける学習を奨励して下さった結果、国際社会で広く活躍する卒業生を、我が法学部から多く輩出いたしました。さらに、学部で熱意あふれる多人数の学生が参加する科目を担当する教員として、本学付属校のみならず、数多くの高等学校でも出張講義・模擬授業を行い、本学志願者の増加にも貢献して下さったことは特筆に値します。

萩谷先生は、二〇一〇年九月から一月にかけて、本学の前身である東京法学社設立一三〇周年と、ボアソナー・梅謙次郎没後、百年にあたる記念事業が行われた際には、ボアソナー・スカイホールでの式典の司会およびコメンテーターを務めるなど、全学の行事でも重要な役割を担って下さいました。その一方で、法政大学法学部の教授として、テレビの情報報道番組のレギュラーコメンテーターやゲストコメンテーターとして出演して本学・本学部双方の知名度、声価を高めて下さったことも、法学部長として申し添えたく思います。先生はまた、学内行政においても、ご着任の四年後の二〇〇九年にまだ創成期にあった国際政治学科に移籍され、前後して二〇〇八年度に法学部政治学科主任、二〇一二年度に大学院国際政治学専攻副主任、国際政治学科主任を務められるという多大なご貢献をなさいました。

萩谷先生は一九四八年七月に東京に生まれ、一九七一年、東京大学法学部ご卒業後、朝日新聞社にご入社され、宇都宮支局、長野支局、東京本社政治部、東京本社外報部にご勤務なさいました。後のご経歴は、すでに述べたとおりです。その後、法政大学法学部でのご研究と教育に反映されることとなる特筆すべき活躍は、一九八五年から一九八七年にテレビ朝日「ニュースリーダー」のメイン・キャスターをお務めになり、御巢鷹山日航ジャンボ機墜落事故などを報道なされたこと、一九八八年から九一年に朝日新聞カイロ特派員として、湾岸戦争を報道なされたこと、一九九一から九二年には朝日新聞ウィーン支局長兼ワルシャワ支局長兼ブラハ支局長として、旧ソ連クーデター事件などを報道なされたことなどが挙げられます。一九九二年から九四年までは朝日新聞外報部次長となられ、引き続き一九九四年から九七年は、再び海外にて朝日新聞ボン支局長として中東和平交渉などを報道なさいました。二〇〇〇年から二〇〇四年までは国内で朝日新聞編集委員として、テレビ朝日「久米宏のニュースステーション」のコメンテーターを務められたことは、本誌読者の皆様にもご記憶にあるかと思えます。この時期の二〇〇一年に、「9・11同時多発テロ」を報道されたことは、多くの皆様の脳裏にも焼き付いているかもしれません。

萩谷先生のご研究・教育上のご専門は多岐にわたります。私は専門ではありませんので必ずしも正確に理解していただけないかもしれませんが、その中心的なテーマは、メディアを通じて見た政治学・国際政治学かと存じます。ご著書・ご共著も、早い時期では、『戦後補償とは何か』（一九九四年）、『一〇〇人の二〇世紀』（一九九五年）、法政大学ご着任後には、『グローバル化とグローバリゼーションとグローバルガバナンス』（法政大学現代法研究所、二〇〇九年）、『公共放送BBCの研究』（二〇一一年）がごさいます。また、ご専門研究領域についてのご講演も数多くなさいました。具体的には、地方自治体、公共団体、教育機関、業界団体、企業、NPOなどで国際政治、国際経済、国内政治、マクロ経済、社会保障などをテーマとしたご講演を、約三〇〇回も行われていることは、社会全体への大きなご貢献と

言えます。

後輩同僚である私の私的印象ではありますが、ここにぜひ、小さなエピソードを記すことをお許しください。ご退職直後の、二〇一九年四月の恒例の法学部の懇親会で、学部長である私は、萩谷先生とご同席する榮譽に恵まれました。私はたまたま、一九八四年から一九九二年まで、当時の西ドイツと統一後のドイツ、スイスに住んでおり、その時のことを話題にさせていただきました。そうしますと、私が苦学生だった一九九〇年のドイツ再統一の前後の時代、メディアのお手伝いの文字どおりアルバイトとしてドイツ語の通訳をしていた頃の知り合い、また私の大学時代の友人で、新聞社に入りドイツを担当していたジャーナリストなどを、萩谷先生はご経歴からして当然のごとく、皆を知っておられ、大いに酒席が盛り上がりました。私はその時、不肖・私と同じく「世界は変わる、国境は変わる」ことを、私より数十倍も身をもって体験された萩谷先生のご努力、そしてそのご経験の法政大学法学部でのご教育への反映というご尽力を、改めて痛感した次第です。

先生の学内外での貢献に対して、法学部教授会は、ご退職直後の本二〇一九年度初頭に、先生を名誉教授に推薦することを決定し、大学よりその称号の授与が承認されました。

本誌は、萩谷順先生の偉大な業績と活躍を讃えるとともに、法政大学、ことに法学部へのご尽力に対して、法学部教授会一同、深甚なる感謝の意を込めて先生に捧げるものです。